

「新しい」学習者への接近 ——「生涯教育と社会教育」の一課題——

白石 克己
(玉川大学)

本学会はこれまで、「生涯教育の実践と展望」(第一回大会)、「中教審答申を検討する」(第二回大会)、「生涯教育と学校教育」(第三回大会)の三つのテーマでシンポジウムを開催してきた。また、『年報』の特集テーマもシンポジウムのテーマとほぼ同じ趣旨で四回を重ねてきた。今回の第四回大会はこうした経過に基づいて、シンポジウムのテーマ「生涯教育と社会教育」は、社会教育の現状を生涯教育の観点から検討し、今後の課題を考察するために設定されたものである。

このテーマで研究発表した会員は次の通りである。

池田秀男(広島大学)——地域学習システムの観点から

坂口順治(立教大学)——企業教育の観点から

盛田義弘(石川県教育委員会)——行政の観点から

1

ところで、「生涯教育」といい「社会教育」といい、その概念はきわめて多義的でその意味であいまいでもある。ことに「生涯教育」概念は、ひとりの「障害(児・者)教育」との混同のような理解はみられなくなったとはいえ、概念の用法には混乱や対立さえある。生涯教育の理念や原理についての思想的対立や理論的対立は、研究上、当然ではあるが、概念そのものの解

積や用法に混乱や対立があるのは、研究上、妨げでさえある。一般に教育学の用語には、生涯教育や社会教育の研究に限ってみても、「自己教育」や「自己学習能力」など各研究者の思い入れを許しやすいものが目立つ。「生涯教育」も各人の教育へのさまざまな願望に合わせて解釈しがちである。いわゆる「プログラムの定義」(I. Scheffler)や「説得的定義」(C.L.Stevenson)となりがちなのである。したがって、「社会教育」と「生涯教育」との関係についての論究は、概念のうえでも慎重な配慮が必要である。

池田会員は、冒頭、この点に言及する。「ここでは」、学校後教育すなわち成人教育に焦点をあてる。具体的には『成人』を対象に公的行政が供給する教育』を中心的関心事とすると指摘する。換言すれば、「社会教育」を、青少年を対象とする学校教育と対置し、また組織的な学校教育と対置し、成人を対象とするノンフォーマル的な教育と限定する、ということである。

この「社会教育」の限定は前述のような慎重な配慮だ、と私は考える。しかし、氏の論究はたんに理論上の枠組としてだけでなく、実践上の問題、理論に基づいた提案としても、この限定の立場を貫く。

すなわち、成人を対象とする社会教育という捉え方では不十分だとする。従来の実証的研究でも行政的な活動でも「成人一般」というのは、事実上、主婦や高齢者に限定されがちである。さらにその主婦・高齢者も主婦一般・高齢者一般ではなく、時間的・空間的・経済的・学力的に余裕のある主婦や高齢者である。そこで池田会員は、これまで学習機会にめぐまれなかった成人にこそ目を向けるべきだ、と提案する。例えば、子育て中の婦人、勤労中年(壮年)、高学歴でない人、学校教育でのいわゆる「落ちこぼれ」となった人などである。しかも実際的にはこの四例のいずれかを「ターゲット」にするかを考えよ、と主張する。そうしないと、現状の学校教育のようにめぐまれた主婦や高齢者を再生産することになる、それはだれでも・どこでも・いつでもに反することにもなる、と分析する。

この提案はフロアの会員をも触発し、就労婦人をも成人教育の対象として注目せよ、などの意見が出された。私も、「スローガン時代」の生涯教育

提案の当初はともかく、国民の強い関心事となっている今は、こうした人々への注目、研究と施策は今後の大きな課題だと思う。このことは長い教育実践の歴史、長い教育学の歴史のなかでもひとつの教訓となっていることである。教授の対象は学生一般・生徒一般として立ち現われてくるときよりも、この学生・あの生徒という関心によってよく見えてくる。すぐれた教師は、例えば「できない子ども」にあるいは「貧しい家庭の子ども」に注目して、学習環境の問題や指導技術の問題に取組み、その腕をみがいてきたからである。ところで、生涯教育の対象となる学習者は性や年齢はいうまでもなく、境遇も職業も学歴・学力も関心もちがう、きわめて広い層である。したがって、無自覚に学習者を考えると、対象としての学習者が見えてこない危険性をもっているのである。この意味でも、やる気のある、高学歴の家庭婦人や高齢者への関心から学習機会にめぐまれない成人への関心へと対象としての学習者の見方を変えていく必要があるだろう。

2

以上のような生涯教育の「新しい」学習者への関心は、いわば公的社会教育上の問題である。わが国の企業教育においては、学習機会にめぐまれない人々はけっして「新しい」学習者ではない。従来より学習機会にかかわりなく、企業目的にふさわしい人材の養成に従事してきた。しかも、その対象者は生涯教育の対象となりうる広範な学習者層である。

坂口順治会員はこの問題に、企業教育は生涯教育の一環、社会教育の一部である、という視点から迫る。わたしたちは一般に企業の教育は利潤追求の手段にすぎず、およそ生涯教育や社会教育の範疇に入れないという常識、というよりも偏見をもってきた。しかし、氏は、わが国の企業が終身雇用制のもとに「一括採用、内部昇進、ジョブ・ローテーションなど」を行なっている以上、学校卒業後の教育として、企業教育を看過すべきでない、と力説する。しかも、氏の分析によれば、「高齢化、高度技術社会の形成、成熟社会への移行という時代的变化にともなって、企業教育はキャリア・ディベロ

ップメントやマン・パワー育成という従来の企業戦力の向上手段としての企業教育ではなく、QWLやメンタルヘルスを含む『全人格的成長』を願う方向を模索している」とする。まして、ライフ・サイクルのなかで「爛熟期」にあり企業とのかかわりの深い成人労働者の教育は、生涯教育の大きな課題である。氏はこうした分析に基づいて具体的に提案する。社会教育にかかわる人の、企業教育への出前サービスを、である。「i)『社会教育』が企業教育の指針となる努力をする。社会教育の指導者が企業教育のコンサルティングを行う。(例えば自己啓発や停年後の学習プログラム) ii) 本学会が『意見書』を出す。iii) 学会と行政との共催で企業の人事担当、労組幹部との啓蒙研究会を定期的にもつ。」——これが坂口会員の具体的な提案である。

池田会員の発表について述べた「新しい」学習者への注目は、確かに既成の企業教育への注目でもあろう。企業では「だれでも」従業員であれば、その教育をOJTであれOFF・JTであれ実施する。学歴や学力については、学習者の実態に即して実施もする。その意味で企業は生涯教育にかかわる「共有財産」や「先行研究」を有しているのである。したがって、社会教育と企業教育との exchange program は生涯教育の一課題である。学会としても、「生涯教育類型研究会」の一環としてこの点の研究を始めてもいる。(この点は『年報』4号の「生涯教育と企業内教育訓練」に一部、研究報告されている。)

3

社会教育、企業教育、学校教育の各機関との連携は、一般に生涯教育の重点的課題といえる。学習内容(やその成果としての単位)の互換はきわめて重要である。学習者にしてみれば、学校教育であれ企業教育であれ、学習要求を満たすことが関心事であり、機関は副次的関心事である。しかし、従来は既成の各機関間の連携は、各機関の制度・歴史にとらわれ、また相互の対話もなく、不十分であった。子どもの問題をめぐる学校教育と社会教育との連携は一昨年シンポジウムでも取上げられたが、連携には至っていない。

そもそも、学校教育内部の間でさえ、大学間の単位互換、通信制（大学・高校）と通学制との単位互換がほとんどないのが現状である。その点で企業は専修学校などの従来の発想にとらわれない学校教育機関との連携を、あるいは外国語の習得あるいはOA機器の知識や技能で、強めている。家庭婦人が英会話や日本語ワープロの技能に関心をもっている以上に、就労婦人にはこの面での関心と要求をもち、実際に学習機会を求めてもいる。この学習要求は企業教育でも社会教育でも学校教育でもどこでも満たされればよいのである。新しいメディアが開発されている今、メディアは既存の各機関（特に学校教育や社会教育）の牢乎たる発想にかかわりなく、学習者とその援助者を連携させようとしている。ここでも「新しい」学習者を登場させているのである。

もちろん、既存の機関、ここで問題にすべき公的社会教育が「新しい」学習者に全くサービスを提供していないわけではない。盛田義弘会員は、石川県教育委員会社会教育課に従事する者として、この点に言及している。氏は、県行政の各部局がどのように「生涯学習事業」を実施しているかを資料によって報告する。この事業は教育委員会が中核となって進めているのは言うまでもない。しかし、石川県の場合、企画開発部（県民生活局——青少年課など）、厚生部（婦人児童課など）、商工労働部（労政訓練課など）、農水林産部（農業改良課など）、環境部、土木部に至るまで実施されているのである。各部、局、課などでさまざまな事業内容（健康・教養・家庭福利・社会福祉など）がソフト面やハード面でなされている。しかし、現状にはタテ割行政から生ずる問題、連携されても担当者の配置替えからくる人の問題等があること、サービスの対象では一般成人男子や勤労青年のものが少なくムラのあること、情報提供・相談も実施しているがバラバラであること、などの問題点が提出もされた。したがって、県行政内部の連携・市行政との連携が必要であり、いわゆる第三セクター方式でダブリヤスキマを手当てしていくことが提案された。

つまり、「新しい」学習者への教育は、不特定多数（県民・市民）として

間接的に提供されてはいるが、そのシステム化に成功していないということであろう。しかし、この点においても学習対象者（ターゲット）を明確にし、したがって、その学習要求も確認し、学習の援助が必要なのであろう。事実、石川県では国際理解の教育を目的として日ソ協会・日米協会などを通して、第3企業との協力を図って国際人の育成に努めている、と聞く。県民一般、成人一般ではない、教養一般ではないのである。

4

この「新しい」学習者への明確なアプローチに関する理論的枠組みは、池田会員から提案されている。一般人を対象としたシステム化も大切だが、「すべての個人」に対して「前学歴や前学力に関係なく」、「学習活動に参加できる行為システムとしての学習システムを」、「日常生活の中に」確立していくことを、氏は強調する。それは「地域」への、「地域学習システム」への視点である。地区公民館から県や企業の学習圏（サービス・エリア）を構造化していく視点である。

「地域学習システム」という視点は、「新しい学習者」に接近することを可能にする、と私は考える。学習者を「あらわ」にするひとつの有力な観点だからである。この点で興味深いのは池田会員の指導のもとに広島大学グループが実施した「学習システムの効果測定に関する研究」（第3回学会大会で発表）である。それは従来のような実証的な研究で学習者の動向を調査するのではなく、研究者（言うまでもなく大学関係者に限らない）が実際に学習者に接近する、いわゆるアクション・リサーチによる研究である。こうした学習者を地域に限定し明確にして研究する傾向は、第4回大会の研究発表に限っても、三浦清一郎会員らの福岡教育大学グループ、山本恒夫会員らの筑波大学グループの研究発表にうかがえる。それぞれ「小都市における人材ボランティア活用事業」なり、「（地区）公民館の生涯教育施設の可能性」なりの問題として学習者に具体的に迫ろうとしているからである。本年第5回大会のシンポジウムの課題もこうした経過から「地域における生涯学習」

となったわけである。

一般に学問研究は「対象」と「方法（論）」によって規定されるとされている。しかし、この「対象」は研究者と無関係にあらかじめ「ころがっている」わけではない。研究者の「関心」によって「見え」てくるのである。学習の機会にめぐまれない人、学習したい人はあらかじめいるのではなく、研究者の「関心」によって、「学習機会にめぐまれていない」「学習したがっている」と見えてくるのである。

自然科学の研究では通常、個々の事実を研究対象として収集（帰納して）理論を構築したり変更したりすると考えられている。しかし、近年の科学史・科学哲学の成果として、（例えば、わが国では村上陽一郎氏）事実によって理論が生まれるというよりも、理論によって新しい事実が見える、ということがいわれている。この場合、理論というのはもちろん確定されたものでなくとも、信仰上の信条のようなものでもよい。要はこうして「見え」た事実の確からしさを検証・反証していくことをとされる。日本のサル学においても、対象（サル）と研究者がいわば「生活をともに」しながらアプローチし、対象をオリの中で静態的に研究するという方法を採用していない。

教育学においても、あらかじめ対象（学習者）を前提にして静態的に研究するのではなく、対象に働きかける（実践活動）ことによって、対象が明らかになってくるのである。実証的研究が「家庭婦人」の学習環境や学習要求をどんなに「科学的」に計っても、単純には「だから、～した方がよい、～しない方がよい」という実践的指令は導き出せない。時間的余裕のないはずの、一就労婦人がある問題をきっかけに学習意欲をもち活動に参加するということはまれなケースではない。もちろん、研究や行政による援助もなく、学習活動が援助できるというわけではない。「やる気」で解決しようとする精神主義的教育観も避けられなければならない。しかし、「学習者」はわたしたち研究者の関心（視点・視座構造）によってこそ、しかもその「学習者」への実践的アプローチによって見えてくるのである。

『年報』3号に乳児教育を論じた金子保会員の論文がある。赤ん坊は学び

たいとは表現しないし学びたいとも見えない。しかし、氏はみずからベビーベッドには入り込み、乳児を教育問題として関心をもつ。それは功利主義的な早教育という立場からの教育研究からではなく、乳児との「対話的關係」とその科学的研究から主張されているものである。

私は、こうした研究は今後生涯教育の研究としてきわめて重要であると思う。「新しい」学習者への接近は、研究者が学習者として、また学習の援助者として、実践のなかには入り込むことによって可能であろう。こうした関心をもって人間を見れば「新しい」学習者はいっそうよく見えてくると私は考える。